



長野県民生児童委員だより

つなぐ

Vol.137

2019
Summer

令和元年7月1日

発行人 長野県民生委員児童委員協議会連合会
会長 伊藤 篤志

編集人 広報委員会
委員長 熊井 文弘

〒380-0928 長野市若里7丁目1番7号
(長野県社会福祉協議会内)

特集 地域に沿った 連携の見守り活動

Contents

- ◆ 特集 地域に沿った連携の見守り活動 2~5
- ◆ 民児協訪問
 - 駒ヶ根市民生委員児童委員協議会 6
 - 飯山市木島地区民生児童委員協議会 7
- ◆ 令和元年度長野県民生委員児童委員協議会連合会事業計画 8

特集

地域に沿った連携の 見守り活動

家族や地域住民相互の関係が希薄化する中で、独居世帯、高齢者のみの世帯、障がい者や独身者、ひきこもり心の病を抱えるなど、家庭を取り巻く環境が複雑化しています。民生児童委員単独で見守りは困難となっています。今回は住民自治組織や社会福祉協議会など地域福祉を担う団体や人材との連携を通じた見守り活動を紹介します。

飯田市街地から車で約1時間、遠山郷として知られる南信濃地区には、あまり例をみないプロジェクトがあります。まちづくり委員会（住民自治組織）に設置された特別専門分科会の「地域福祉プロジェクト」。名前はオーソドックスですが、委員は有志で任期の定めがないなど、形式にとらわれず実践を重視しているのが特徴です。民児協からは正副会長と会計が参加し、官民の福祉関係者に公募委員を含めて平成25年に発足、今は16人のメンバーで活動しています。旧南信濃村から合併で飯田市に

なつて8年という当時、役場が身近で身内だった時と同じではやっていけない、人口減少も高齢化も急速に進む地域の問題を、自分たちで何とかしなければならぬと危機感を覚える人が増え、自然発生的プロジェクトだったといえます。メンバーはまず、地区内を歩いて課題を探ることから始め、基本は「見守り」にあることを再確認します。そこで早速「声かけカレンダー」を制作・配布するのですが、小学生の絵を採用し、事業所には中学生が配布するなど、全住民を巻き込む工夫をします。さらに翌年は「みなみ信濃安心メモ」

見守り活動を続ける中で、次の課題が浮かび上がりました。女性が積極的に研究から「移送サービス」を

合併後の危機感から立ち上がった 有志による官民協働のプロジェクト

の作成へ。民生児童委員とプロジェクトメンバーが2人1組になって独居世帯と高齢世帯を訪問し、救急隊が駆け付けけるなど緊急時に必要事項がすぐに分かるポスター大の用紙を、当人や遠方の家族からの合意のあったお宅に配布し、目の付きやすい場所に貼ってもらいます。毎年訪問してデータを微調整することそのものも、大事な見守り活動になっています。

見守り活動の積み重ねから「移送サービス」を目指し研究中

事例1

飯田市南信濃地区 「地域福祉プロジェクト」



▲自然発生的に立ち上がった「地域福祉プロジェクト」がアイデアを次々と実行している



▲毎年「声かけカレンダー」を事業所に渡すのは中学生の役割

極的に外に出て交流するのに対し、男性は家にこもりがちになっていくことです。そこで男性ターゲットの「ふれあいサロンきらく会」を毎月開催することに。将棋やマージャンなど男性が好みそうなプログラムを用意し、成果はあつたものの、男性につられて女性が増えるようになり、いつのまにか数でも勝るようになり……。ここで判明したのが「足」の問題です。高齢で免許を返納し、かといって介護認定も受けない場合、サロンへの参加どころか買い物にも行けなくなってしまう。気軽に利用できる移動手段があれば、外に出る機会も増えるはずで、認知症予防効果も期待でき、結果的には見守りということになります。プロジェクトは、次のステップとして移送サービスの実現を目指すことにしました。



▲男性の引きこもりを避けるために始めた「ふれあいサロンきらく会」

場面が多いことや、自分の車に人を乗せる協力ができるとした人も少なくなかったからです。また、飯田市の出先機関である南信濃自治振興センターに勤務しているのが代々地元出身者であるのも、地域福祉プロジェクトの強みです。このプロジェクトを核に見守り態勢を地区全体に浸透させようとしていることも南信濃の特徴で、例えば5年前には地区内の事業所を対象に、緊急事態に遭遇したとき、どう行政につなげるかの研修を行い、懇談会を行っています。そのため、新聞や牛乳の配達、宅配業者、ガス業者など、すべての事業所が見守り隊となっているのです。限界集落も出始めているという南信濃の取り組みは、同じ課題を抱える地区にとつての希望となりそうです。

事例2 長野市大豆島地区 「ご近所支え合い・見守りガイド」

第三次地域福祉活動 計画は地区主導型に



▲各區で、地域の福祉士業を検討するワークショップの様子

大豆島地区は長野市の中心部から車で10分、犀川と千曲川の合流地点の北岸に位置し、五輪大橋からエムエーブに続く道路が地区を走り、量販店が軒を連ねています。人口は12,621人、高齢化率は22.9%と長野市内では2番目に低い地区です。「子どもの数も増え、人の顔がわからなくなっている」と話すのは、大豆島地区民生委員児童委員協議会会長の轟保則さんです。轟さんは大豆島地区第三次地域福祉計画策定委員会で副委員長を務めました。

長野市は平成17年に「地域福祉活動計画」を策定し、5年ごとに計画を見直してきました。22年には市内全32地区で自治組織「住民愛・つどい愛」「地域と住民をつなぐ学び愛・伝え愛」です。「これは地域の皆さんの意見を集約したもの」と轟さんは説明します。策定の過程では、大豆島地区の7つの区それぞれに、福祉関係者だけでなく消防団など地域をよく知る住民を加え懇談会を開催しました。合計で300人以上の住民が、地域の良さや必要な事業などをワークショップ形式で出し合い、意見を付箋に書いて発表し合いました。その意見をまとめて策定委員会でカテゴリーに分けていく作業を根気よく続けた結果、この3つの柱となったのです。

具体的には、家事援助、福祉移送、子育てサロン、ふれあい広場、社協など地域の団体と連携し進め

「自協議会」が立ち上がり、地区ごとの地域活動計画策定推進を行ってきました。大豆島地区では第二次に引き続き、29年には住民自治協議会福祉健康部会を中心に第三次策定委員会を設置し、民生児童委員も4人加わって、令和5年度までの5カ年の計画を策定し、この春発表しました。

計画の柱は3つ、「地域でささえ愛・たすけ愛」「みんなであれ

（次頁へつづく）

てきた事業についても、改めてその連携や住民への周知を確認し合い継続としました。ふれあい会食については参加しやすいよう区ごとの開催に変更しました。地域福祉懇談会については、区ごとの

機能しなかった前回の反省を生かして
住民全員が見守り役として参加

今回新規事業として加わったのが「見守りネットワーク」です。実は第2次計画の際にも、大豆島地区全体で班長・常会長・民生児童委員の連携として組み込まれていました。しかし実際はほとんど機能しませんでした。「民児協の定例会でも課題となっていた」と轟さん。今回は、班長や常会長などの役員用の見守りガイドに加え、「地域のみなさんへ 近所支え合い・見守りにご協力ください」というチラシ（写真参照）を全戸に配布。一軒一軒に口頭で説明し、区長や民生児童委員などの連絡先を記入しておき、少しでも気になることがあれば連絡がとれる方式になっています。「郵便物がたまっていない」「元気がない、体調が悪そう」など、見守りのポイントを具体的に明記しました。日ごろからあいさつをするなどコミュニケーションを図って、ちょっとした気づきを相談し合う、そんな地域社会をと訴えています。

開催・推進を新たに加えました。新規事業としては、住民から出た「あいさつ運動」を加えました。あいさつを通して近所が見守りあうことで、顔の見える関係作りを進めます。

地域福祉活動計画の概要版はこの春、全戸に配布され始動したばかりです。「この計画は民生児童委員自身がわかっていないと動かない、これからが勝負」と轟さんは決意を語ってくれました。区の役員の任期は1年から2年と短く、全体を把握し継続して進められるキーパーソンが民生児童委員なのです。進捗状況についても民生児童委員が加わる福祉健康部会の体制の中に、検討部会を設置し毎月点検・評価を行っていく予定です。



▲大豆島地区民児協会長轟保則さん

「げたばきヘルパー」の現状と課題
社会福祉協議会が自立し福祉政策を強化

平成23年3月12日、長野県北部地震が栄村を襲いました。8年を経て栄村の人口が1800人に減少。被災時にもお年寄りのケアの土台となった「げたばきヘルパー」

豪雪地で訪問介護や安否確認ができる体制を整えようと、平成12年に村独自の「げたばきヘル



▲「高齢者総合福祉センター」1Fはデイサービス、2Fには社会福祉協議会がある

地域のみなさんへ 近所支え合い・見守りガイド 保存版

近所支え合い・見守りにご協力ください

みんなが住み慣れた地域で安心して暮らしていくためには、日頃から住民同士がコミュニケーションをはかり、お互いに気にかけて、見守り合っていくことが大切です。あいさつや交流、散歩のついでなど、日々の生活の中にもたくさんのお見守りの形があります。普段の生活の中で感じた「あの方いつもと違うな」「どうしたんだろう?」そんなちょっとした気づきが見守りにつながります。

見守りポイント

- 郵便物や新聞が郵便受けにたまっている
- 洗濯物や布団が干したままになっている
- 雨戸やカーテンが閉まったままになっている
- 元気がない、体調が悪そう
- 食品をさらわれたなど被害的なことを言う
- 子どもの泣き声、家族の怒鳴り声が度々聞こえる
- 不自然なアザや傷がある
- 見慣れない人や見慣れない車が入り出している

気がついたら、班長さんや常会長さん、区長さん、民生児童委員さんなどにご相談ください。

	お名前	電話番号
班長		
常会長		
区長		
副区長		
民生児童委員		

緊急時は、警察(110)、消防・救急(119)へ通報してください。

大豆島地区住民自治協議会 福祉健康部会 平成31年4月発行

▲全戸配布した見守りガイド



▲げたばきヘルパーの多くは訪問介護と訪問による安否確認を行っているが、ニーズは変わりつつある。

パー」制度をスタートしました。初年度は50代から60代の女性を中心とした住民181人が、講習を受けてヘルパー2級と3級を取得しました。そのうち登録者が116人、31の集落を8ブロックに分けてそれぞれ5人から23人の体制でお年寄りを見守る組織が誕生したのです。訪問型のホームヘルプサービス、安否確認を兼ねた配食サービス、電話で確認する安心コール（2011年に見守りサービスに変更）が主な事業で、当時は全国的にも話題となりました。

が日ごろからお年寄りの状態を把握していたため、避難所での健康管理にげたばきヘルパーが活躍しました。当時は民生児童委員の中にもヘルパー登録者が数人おり、その制度の効果は絶大でした。しかし、令和元年5月度の登録者は54人、活動できているのは22人になっていました。戸惑いながら社協の担当者に経緯を聞いてみると、それには理由がありました。まず、介護保険法の変化。スタート時はヘルパー3級資格がありホームヘルプ活動ができたのです。家族や親せき、ご近所のお年寄りをケアすることで、多少の収入にもなることから、多くの方が取得しました。ところがその後ヘルパー3級が廃止（資格要件を満たさない）。制度の見直しを検討しなければいけないところに北部地震が起これってしまったのです。その後ヘルパー自体の高齢化も進み活動できる人材が減っていきま

した。ただ、震災後は村唯一の訪問介護事業所でもある社会福祉協議会に常勤ヘルパーを増員したり、復興支援を行う総合サポートセンターを設置することで体制を維持。さらに、平成29年4月からは社協が「高齢者総合福祉センター」の指定管理者となり、通所介護と訪問介護を一体的に行いながら、様々な福祉事業を展開しています。



▲デイサービスにあるカフェでは「げたばきヘルパー」島田さんたちと利用者が楽しく歓談

事業開設当初から民生児童委員でげたばきヘルパーを務める島田たつ子さんを訪ねました。退職後ヘルパー2級を取得。現在もデイサービスでパートタイムの介護職員として週2〜3日ほど「げたばきヘルパー」の役割を担っています。「地域で民生児童委員として見守り活動をしながら、デイサービスで大勢のお年寄りを見守ることができている」と島田さん。「震災の後、避難所や仮設住宅でコミュニティができ、自宅に戻ったらそのコミュニティがなくなっ

個別訪問から交流の場づくりへ 地域の支え合いを呼びかけ再募集

てしまった。みんなが集まれる場所、人とコミュニケーションを取ることが大切」と強調します。ホームヘルプが中心だった「げたばきヘルパー」から、いまは、住民同士の交流をつくることを大切にした役割へとニーズも変化してきました。

社協全体で今年度は「見守り」をキーワードとし、住み慣れた集落、家でいつまでも暮らし続けていたただけのようなサービスをを行うとのこと。特に、住民どうしが支え合う地域共生社会の実現を目指しているそうです。そのためにも先進的だった地域住民によるげたばきヘルパー制度を整えなければいけないと、新たな人材確保に向け5月発行の社協だよりで、現状を訴え、新たに登録してくれる住民に説明会を開き、募集を開始したところでした。



訪問



記者が地区民児協におじゃまし、会長や委員とコミュニケーションを図って、第三者の目でレポートしていく「訪問」コーナーです。

民児協
だより



駒ヶ根市民生委員児童委員協議会



▲定例会の前に会合をもつ理事の皆さん。中央の女性が山浦会長、右から3人目が赤羽根副会長

全委員が一堂に会する定例会は研修の場
地区を超えた交流と情報交換が連帯感を高める

中央アルプスと南アルプスを同時に望む絶好の眺望から「アルプスがふたつ映えるまち」のキャッチフレーズで知られる駒ヶ根市。定例会は地区単位でなく、市内3地区の民生委員と主任児童委員合計69人が一堂に会するのが伝統です。大きなホールに11のテーブルと名札が置かれ、6〜7人がグループとなって着席。ユニークなのは、このグループを地区ごとにしていないことで、赤穂地区会長の

山浦泰子さんと、福岡地区会長の赤羽根浩さんが、市の正副会長になってからのアイデアです。当番による信条朗読を、全員が復唱することから定例会は始まりません。連絡事項を早目に終えるとメインの研修です。例えば「日常支援の事例研究」として「高齢ひとり暮らし男性のゴミ出し問題」を取り上げるとすると、さっそくグループ討議へ。「高齢になってからのゴミ分別は難しい」「有償ボランティアやNPOのゴミ出しサービスがある」「有償では、経済状況が良くない人に利用を勧められない」「ゴミ出しを手伝うのは民生委員の役割ではないが、そう言っていられなくなるのでは」「一などなど、次々と意見が出ます。地域を超え、ベテランと新人が入り混じるメンバーが交流しながら情報の幅が広がり、建設的な方向へ。討議後はグループ毎の発表と対応参考案の提示があり、思いがけない角度から勉強になることもあります。日ごろの活動は地区の実情に合わせてさまざまです。代表的なのは、高齢者が集う「サロ

ン」活動支援で、例えば山浦会長の地区には「コスモスⅠ、Ⅱ」のふたつのサロンがあり「お助け隊」を名乗る委員が手品などの出し物で協力しています。赤羽根副会長の地区は「ふれあいサロンお茶飲み会」として、食事会やバス旅行を実施。定員を上回る参加希望者があるほど好評なのですが、実は、深刻なのは外に出ない人、家族が認知症を隠すなど、つなぐ以前のところにいる人たちだと言います。8050問題をはじめ、障がい、生活困窮等さまざまな悩みを持つ住民に、柔軟な対応が必要な場面も。正副会長はじめ、ベテラン委員の多さが要所要所を抑える力になっていくように感じられました。



▲定例会のメインは研修会。事例検討で交流しながら研鑽を積む

飯山市木島地区民生児童委員協議会



▲田園地帯が続く風光明媚な場所で(池田会長は後列真ん中)

見守り活動が委員の日常になじんで、
仲良く楽しく活動するところがモットー

飯山市を流れる千曲川と樽川に挟まれた三角州地帯の広々とした田園地帯。冬は豪雪地としても知られています。「除雪に関しては手厚い体制がとられている」と話すのは会長の池田澄子さん。各地区の区長と民生児童委員が取り次ぎ役となり、除雪支援員の派遣をしています。高齢者玄関先除雪支援では平成30年度で163世帯、延べ3561回の除雪を行いました。また、木島地区では戦没者・開拓殉難者追悼平和式典を毎年行っており、その進行を民生児童

委員が進めるなど、地域の先人たちを大切にしています。

民生児童委員は8人、うち1人が主任児童委員です。6年前に全員が入り替えとなり、福祉法人の理事長などの経験を生かし、池田さんが会長に。メンバー8人中7人が女性です。定例会では、市や地区の社会福祉協議会の職員はもちろん、区長会からのお知らせなど、地区職員も出席することがあります。「木島地区振興委員会」という住民自治組織があり、区長会や社会福祉協議会、その他さまざまな地区役員や団体が連携して地域を支えています。民生児童委員全員が地区社協の理事にもなっているため、地域を担う人材の一員として民生児童委員が日常的に様々な活動に加わっているのがこの地域の特徴です。

また木島地区にも社協を事務局にした「見守りとうど制度」があり、組長が配りものを手渡しにして、住民一人一人の安否を確認するなど心配りを大切に行っています。民生児童委員もメンバーで、研修会にも参加。

高齢者の生きがい対策としては、各地域ごとの「集落サロン」に力を注いでいます。年間4回以上、



▲定例会では社協職員や地区職員も参加することがあります

地域によっては民生児童委員が世話人として体操やゲーム、外出講座などを企画、多いときで20人ほどの参加者があるとのこと。

主任児童委員が中心となって子育てサロンも月2回開催。未就園児の母子約10組が参加。民生児童委員も参加し顔の見える関係作りを心掛けています。木島小学校では1年生のクラスに民生児童委員が出向き掃除の指導や、登下校時の見守り活動を行うなどコミュニケーションスクール活動にも関わっています。

「民生児童委員は地域の潤滑油さりげなく情報を伝える役を果たせたら。まずは私たち民生児童委員が活動を楽しんでやるのが大事」と、飯山市の会長も務める池田さんは、明るい表情で話してくれました。



表紙写真紹介

戸隠神社杉並木

随神門から約500メートルにわたって200本以上の杉の巨樹が続く。その歴史は400年以上と言われ、戸隠神社の象徴になっている。平成30年9月に撮影。

撮影

長野市長沼地区民児協、委員歴2期6年目

前島 一三さん

profile 写真歴20年、自然の風景が好き。
写真クラブ「写友四季」所属。



令和元年度長野県民生委員児童委員協議会連合会事業計画

「支えあう 住みよい社会 地域から」～住民の笑顔、安全、安心のために～

I 事業の方針(抜粋)

今日、少子高齢社会の進行や人間関係の希薄化などを背景に、地域社会や家族の姿は大きく変化し、育児、介護、障がい、虐待、貧困、ひきこもり等、住民が直面する生活問題は、一層多様化、複合複雑化してきています。

こうしたなか、地域共生社会の実現に向けた「我が事・丸ごと」の地域づくりを推進していくため、住民の最も身近な相談相手であり、日々の活動を通して様々な課題を抱えた住民の福祉サービスへのつなぎ役を果たしている民生委員・児童委員には「住民が主体的に地域課題を把握して解決を試みる体制づくり」を担う存在としてより一層の期待が寄せられています。

一方、期待の高まりは民生委員・児童委員活動の負担増大にもつながっており、継続して委員が活動しやすい環境づくりを進めていくことが重要です。

II 事業の重点

1 災害に備える委員活動の推進

全国各地において土砂災害、噴火、風水害、地震などの災害が発生し、多くの委員も被災している現状があり、災害時要援護者の支援は委員だけが担うのではなく、地域ぐるみの取り組みが必要です。災害時に円滑な対応を行うためには平常時に避難支援などの確認や日頃の地域住民とのつながりが重要であるため、行政機関や地域の関係団体と連携・協力しながら、災害に備える活動の取り組みを進めます。

2 地域社会での孤立・孤独をなくす運動の推進

長野県と締結した「長野県地域見守り活動に関する協定」に基づき、県と相互の連携を強化し、市町村からの協力要請により安否確認等を行うことになっていることなどから、日々の相談・見守り活動を充実させる支援を行うとともに、行政や地域の関係団体等と協力しながら住民同士の互助の取り組みを進めます。

3 地域における子育て支援活動の推進

児童虐待や犯罪被害等から子どもを守り、課題を抱えた親子を早期に発見し、つなぎ、支える活動に取り組みます。このために関係機関、地区担当の児童委員と主任児童委員が連携を強め、子育てを応援する地域づくりの推進に努めます。

4 生活困窮世帯(生活困難家庭)への相談支援活動の推進

誰もが生活困窮に陥る恐れがある現代社会の中、生活に困っている方が自立するための支援が急がれており、生活困窮者自立支援制度における民生委員・児童委員の行政等への協力や必要な情報共有など生活就労支援センター「まいさぼ」等関係機関との連携を進めます。

5 市町村民児協の組織強化の推進

地域版活動強化方策作成の支援・協力を行うとともに、県内・県外民児協や広域での民児協との交換研修の促進を図るため、交換研修等を実施した民児協に対して引き続き助成金の交付を行います。

6 民生委員・児童委員が活動しやすい環境づくりの推進

民生委員・児童委員ならびに単位民児協における課題を整理・検討し、民生委員・児童委員が活動しやすい環境整備を進めるとともに民生委員・児童委員の「なり手」確保に向けた対策を検討します。

7 広報活動の充実

地域住民などに、民生委員・児童委員の制度や役割と活動への理解を深めてもらうため、ホームページの充実を図るとともに、県広報誌に掲載してもらうよう県へ働きかけます。

第24回長野県民生委員児童委員大会の開催 令和元年7月25日・26日 佐久市コスモホールで開催します



編集委員
リレー日記

令和の時代に入り、最初の「つなぐ」の特集では「地域に沿った見守り活動」をテーマに3力所の事例を取り上げました。安否確認と見守りは、言うまでもなく民生児童委員の基本的活動の一つです。今回、私は本誌の取材編集を担当する寺澤順子さんに同行して、長野市大豆島と栄村を訪ねました。

長野市大豆島地区の「見守りネットワーク」は、住民自治協議会が策定した「地域福祉活動計画」の一環として今年度からスタートしました。策定には、轟民児協会長をはじめ複数の委員が参画したということですが、今後の成果が期待されます。

栄村には、8年前の震災時に訪問したことがあります。その後、復興は進んだものの、人口は1841人と約20%減り、高齢化率は50%を超えたということです。今回の取材では、栄村社会福祉協議会担当者とはばきヘルパーを務める島田たつ子さんに話を伺いました。お二人とも福祉の現状について淡々と話されましたが、言葉の端々に自分たちの住む村に寄せる思いが感じられました。

(熊井 文弘)

編集委員 / 熊井 文弘・土屋 珠江・増田 早苗・深澤 保雄